

福祉・ひとグループ

福祉・ひとグループの質問を始めます。

私たちのグループは、誰もが安心して過ごせる広島県の実現のため、特に障害者の方や出産・子育てに関する取組について話し合いました。

質問1 「障害者の方が暮らしやすい広島県」について

一つ目の質問は、「障害者の方が暮らしやすい広島県の実現」です。

皆さんは、フロアバレーボールを知っていますか？フロアバレーボールは、視覚障害者と健常者が一緒にプレーできるように考案された球技です。私は、障害者と健常者が一緒に楽しそうにプレーする様子を見て、障害者の方が健常者と同じように様々な活動に安心して取り組める暮らしやすい環境を整備する必要があると強く思いました。

目や耳の不自由な障害者の方の暮らしをサポートする盲導犬・介助犬・聴導犬という特別な訓練を受けた犬、補助犬がいます。

令和6年現在、広島県の補助犬の実働数は、盲導犬19頭、介助犬1頭、聴導犬はゼロで、県全体では20頭とまだまだ少ない状況です。

補助犬になるには、盲導犬の場合、パピーウォーカーというボランティアの家で、人間と暮らすためのルールを学びながら1歳まで育てられ、その後、約1年間、訓練センターでトレーナーから訓練を受けます。

一人前の補助犬を育てるには、約2年の時間と数百万円の費用がかかり、その多くを寄付金やボランティアに頼っているそうです。

そこで一つ目の提案です。補助犬を増やすため、パピーウォーカーや訓練を行う事業者への補助、公的な訓練施設の整備などの支援を行ってはどうでしょうか。

また、補助犬を増やすと同時に、補助犬に対する理解と協力を広めることもとても重要と思います。そのため、「見て触れる体験会」や「啓発ポスターコンクール」、「街中への募金箱の設置」など参加・体験型の啓発活動を行ってはどうでしょうか。

私たちがポスターの作成や募金などに積極的に参加したいと思います。

一人でも多くの希望する方に補助犬を届けることができればと思います。

視覚障害者の方をサポートする設備として点字ブロックがあります。

駅や道路、公共施設など様々な場所に点字ブロックが設置されていますが、お店の中など、ない場所も多くあります。

また、点字ブロックの上に物が置かれていて、視覚障害者の方が困っているのを見たこともあります。

そこで提案です。最近では、スマホと連動した「QRコード付きの点字ブロック」や「しゃべる点字ブロック」などの研究が進んでおり、こうした「ITやAIを活用した点字ブロック」を道路や施設のほか、お店などに広く設置してはどうでしょうか。

通行の案内だけでなく、売り場や商品の説明、また物を置こうとした人への注意など障害者の方がより安全で便利に外出できるようになり、誰もが暮らしやすい広島県になると思います。

答弁（健康福祉局長）

まず、1つめの御提案である「補助犬を増やすための取組」や「補助犬に対する理解と協力を広める取組」について、お答えします。

皆さんが言われたとおり、広島県には、現在、20頭の補助犬がおり、障害のある方のパートナーとして、障害者の自立や社会生活を送るために重要な役割を果たしています。

補助犬を育てるためには、1頭あたり約500万円が必要であるといわれています。

そのうち、広島県では、県内の補助犬育成団体に対して、1頭あたり約200万円を補助しているところです。

今のところ、補助犬が足りていない状況にはなっていないため、すぐに新たな訓練施設を整備する必要はないと考えていますが、今後とも希望する方に補助犬を届けることができるよう、必要な支援を行っていきます。

また、御提案にあった補助犬に対する理解と協力を広める取組も大変重要だと考えています。

広島県では、これまで12月に開催される人権啓発イベント「ヒューマンフェスタひろしま」において、新たに補助犬とパートナーになる方を紹介するセレモニーや補助犬の仕事について知ってもらうためのデモンストレーションを実施するなど、県民のみならず、市民が補助犬について知る機会をつくっているところですが、まだまだ補助犬への理解が進んでおらず、施設への同伴入場を断られる事例などがあります。

そのため、子供から大人まで多くの県民のみなさまが積極的に参加したいと思っただけのような参加・体験型の啓発活動を充実させるなど、今後とも補助犬に対する県民の皆様の理解を深めていきます。

次に、2つ目の御提案であるITやAIを活用した点字ブロックの設置について、お答えします。

視覚障害のある方にとって、点字ブロックは安心して外出するためには欠かせないものです。

広島県では、誰もが暮らしやすい福祉のまちづくりを進めていくため、「広島県福祉のまちづくり条例」を作り、公共施設や視覚障害者が利用することの多い道路に点字ブロックを設置することを進めてきました。

しかしながら、点字ブロックがない場所はまだまだたくさんあり、さらに増やしていく必要があると考えています。

皆さんから御提案のあった、QRコード付きの点字ブロックなど、ITやAIを活用した点字ブロックは、まだ研究段階とは伺っていますが、移動の方向や段差について注意を促す、これまでの点字ブロックよりも多くの情報を伝えることができ、視覚障害者の外出が安全で便利なものになると期待しています。

新しい点字ブロックの研究が進み、今後、成果や課題が得られれば、それを踏まえて、道路や公共施設の管理者に導入を促すことを検討していきます。

また、大きなお店には道路からお店の入り口までや、階段などに、点字ブロックを設置することを推奨しています。

障害のある方が買い物しやすい環境づくりをさらに進めてもらえるよう、お店の人に対して、デジタル技術を使った便利なツールなどの情報を発信するとともに、障害について知り、点字ブロックの上に物を置かないなど必要な配慮について学ぶ「あいサポート運動」を広めていく取組も行っています。

こうした取組により、障害の有無にかかわらず、誰もが暮らしやすい広島県の実現を目指していきます。

質問2 「出産から子育てまで安心できる広島県」について

二つ目の質問は、「出産から子育てまで安心できる広島県の実現」です。

人口減少や少子化が大きな問題となっている中、安心して妊娠生活を送り、無事に出産・子育てができる環境を整えることが必要だと思います。

県内の分娩取扱い施設について調べてみると、平成18年の76施設から令和4年は44施設と4割減となっており、出生数（しゅっしょうすう）の3割減を上回る減少率となっています。

また、県内の半分を超える12の市や町で分娩施設がなく、通院の負担や里帰り出産ができないなど、不安を感じている方も多いのではないのでしょうか。

また、産科医師の数は、15歳から49歳までの女性の人口10万人当たりでは、平成18年と令和2年の比較では増えているものの、全国平均の46.7人と比べて45.2人と少なく、また実際に分娩を取り扱う医師は限られているそうです。

今後、医師の高齢化や働き方改革なども考えると、必要な医師の数が不足してしまうのではないのでしょうか。

そこで一つ目の提案です。妊婦さんが安心して妊娠生活を送り、希望する地域や施設で出産できるよう分娩施設や産科医師を増やす取組を進める必要があるのではないのでしょうか。そうすれば、妊婦さんは自分にあった病院や医師を見つけることができると思います。

次は、出産後の環境整備についてです。出産後の子育てにも、不安や悩みがたくさんあり、相談できずに困っている人も多いと思います。

そこで二つ目の提案です。そうした親子が気軽に立ち寄り、楽しめる場があればいいのではないのでしょうか？そうすれば、子ども同士が遊ぶことができるし、親同士も育児の悩みや体験などを話し、共有することで心が軽くなり、子育てを頑張ろう、楽しもうとなるのではないのでしょうか？

こうした取組を実現できたら、安心して出産・子育てのできる理想の広島県に近づくとおもいます。

答弁（健康福祉局長）

まず、1つ目の御提案である分娩施設や産科医師を増やす取組について、お答えします。

産科の医師数、すなわち出産を取り扱うことができる「分娩取扱医師」の数について、厚生労働省のデータによれば、全国41位と少ない状況にあり、県としても、産科医師を確保することが重要であると認識しています。

このため、広島県で働く医師を志す大学生を対象とした奨学金について、令和2年度から産科医師については、奨学金を返さなくてもよい要件を拡大し、産科医師になりやすい環境づくりに取り組んでいるところです。

また、厚生労働省の調査研究等では、産科医師に関して、

- ・いつ出産への対応が入るかわからず、残業しなければならない
- ・仕事が忙しいため、産科医師自身が出産や子育ての時間を取れない

などの課題があることが明らかになったため、県としては、育児休業や職場復帰の支援に取り組む病院に補助金などの支援を行っています。

このように、県内で数が限られる産科医師について、業務の負担も考慮する必要がある中で、分娩施設を増やすのではなく、24時間体制で安心して出産できる環境を整備するため、地域の中で設備等が整った中心的な病院に、産科医師を集中的に配置するよう工夫しているところです。

県としては、大学医学部や、地域の医療機関等とも連携しながら、産科医師を確保・育成するとともに、どこに住んでいても、安心して妊娠・出産できる体制づくりに、引き続き、取り組んでいきます。

次に、2つ目の御提案である親子が気軽に立ち寄り、楽しめる場についてお答えします。

広島県では、県内の全ての市町に、子育て中の親子が気軽に立ち寄り、遊べる子育て支援施設として、「地域子育て支援拠点」の設置を進めており、令和6年4月1日時点で176か所に増えています。

「地域子育て支援拠点」では、保護者は、子供を遊ばせながら情報交換や育児相談ができるほか、地域の子育て支援サービスの情報を得ることができ、令和4年度には1日平均で約1,400組の親子に利用してもらっています。

また、広島県では、保護者だけでは解決が難しい悩みにも、専門職が主体となって、きめ細かに寄り添い、見守り、支援する仕組みとして「ひろしまネウボラ」の構築を平成29年度から進め、現在では三次市など18市町で実施されています。

市町に設置されているネウボラ拠点には、保健師などがネウボラ相談員として配置され、妊婦や子育て中の家庭がいつでも気軽に立ち寄り相談することができ、必要に応じて相談員が専門機関等を紹介するなど、適切な支援に繋ぐことが可能となっています。

さらに、広島県では、オンラインで相談・交流できる体制を整えており、家においても保健師への相談、子供向けイベントへの参加、同じ地域での子育て中の方との交流が可能です。

こういった相談できる場所や、気軽に立ち寄れる場所があることをもっと多くの人に知ってもらい、安心して出産・子育てができる実感してもらえよう、引き続き取り組んでいきます。